

英語における名前と 呼び掛け語についての一考察

近 藤 富 英

0. はじめに

英米と日本語では名前や呼び掛け語に関するスタイルが異なっているのは、よく指摘されることである。拙論ではその特徴を整理してその背景に横たわる理由についても考察してみたい。

1. 名前は大事な会話の一部

名前を聞いたのに、つい忘れてしまい、今さらあらためて聞けないような場合がある。しかし、そんな時でも日本語では相手の名前に言及しながら会話をする習慣があまり無いので、名前を忘れた相手との会話でも困ることはあまりないはずである。英語ではどうであろうか。たとえば、アメリカのTVドラマの『大草原の小さな家』のひとつのエピソード (A Dark Sage (ある医師)) では、以下のように名前がたくさん使われている。

Jenny: Well, you tell her we send our sympathy.

Nelse: Oh, thank you, Jenney. That's very kind of you.

Nathan: Nelse.

Nelse: Nathan.

Baker: Let's go, Nelse.

ネルス (Nelse) の奥さんが踝をくじいたというので、ネルスがベーカー医師 (Baker) のところへやってくると、お産を控えたジェニー (Jenny) に夫のネイサン (Nathan) が付き添い、診察中の場面である。ジェニーはネルスの奥さんを気遣って Well, you tell her we send our sympathy. と言うと、ネルスは Oh, thank you, Jenny. と名前を付けてお礼を述べている。その後、ネイサンとネルスは互いの名前を呼び合いながら別れを告げ、また、ベーカー医師は、Let's go, Nelse. と名前を付けて出発を告げている。

このやりとりを普通の日本語にすればおそらく以下のようなになるであろう。

ジェニー：まあ、そう。お大事にね。

ネルス：ありがとう。あなたもね。

ネイサン：じゃ。

ネルス：や、どうも。

ベーカー：さあ、行こうか。

もし、とくに名前の部分を直訳風に訳せば以下のようなになるであろう。

ジェニー：まあ、そう。お大事にね。

ネルス：ありがとう、ジェニー。あなたもね。

ネイサン：ネルス。

ネルス：ネイサン。

ベーカー：さあ、行こうか、ネルス。

直訳風にすると、名前が多いし、不自然な感じは否めない。すなわち、そのまま日本語にすると不自然なほど、英語では普通に名前、それもファーストネームを多用していることがわかる。

したがって、英語圏では名前を頻繁に呼ばれることになり、こちらからも相手の名前を会話の途中でときどき言う必要が生じてくる。もちろん、言わなくても会話に支障はないであろうが、相手が頻繁にこちらの名前を言うのに、こちらが言わないのは、よそよそしさやぎこちなさ、場合によっては冷たさを与

えるのではないかと考える。逆に日本語では名前をいちいち言わないのが普通であるので、日本語で「おはようございます。〇〇先生」などと言われたら、逆に変な気持がするであろう。

2. フレンドリーネスを求める英語

名前を知らなくても会話が可能な日本語と、名前を付け加えないとどうにも落ち着かない英語の違いはどこから生じてくるのであろうか。英語では相手と自分は対等でフレンドリーであるべきという考え方が一般的なため、親しみを表す手段として小さいころからファーストネームを使うことに慣れており、名前は大事な会話の付属物になっている。したがって、逆に名前を付けないと、よそよそしさを与えかねないのである。日本語は相手を優位な立場に置いて謙遜することを美德としてきた文化のため、気軽に名前、とくにファーストネームを用いることには抵抗がある。そのような背景があるため、英語での紹介においては、ファーストネームやニックネームで呼ぶように積極的に求めたりすることもある。たとえば、My name is Kevin Tremain. Please call me Kev for short. (ケビン・トリメインといます。短くケブと呼んでください。) このように英語では出会った瞬間でさえもファーストネームで呼び合う間柄を求めたりするが、日本語での自己紹介においては苗字かフルネームを名乗っても、その後ファーストネームやニックネームで呼び合う関係にはなかなかない。すなわち、英語では出会って1分後にファーストネームで呼び合うことができても、日本語ではとくに大人同士では一生かかっても苗字のままです踏みすることになることが多い。

3. 心理的距離と名前

英語ではすぐにファーストネームで呼び合うことが多いと述べたが、アメリ

力では学生が大学の教授をファーストネームで呼ぶことも可能であり、教授も気にしないどころか親しみを持たれていることに気をよくする人もいるようだ。The Culture Puzzle (Cross-Cultural Communication for English as a Second Language) という ESL 教材の中に英語を学ぶ外国人留学生とアメリカ人教師 (Rose Arno) の授業のようすを表した部分がある。初めての授業なので、自己紹介や互いにどう呼び合うかについての会話であるが、その一部のダイアローグは以下のような内容である。

Rose Arno: Let's continue with the second student. What is your name?

Magdalena Chaves: My name is Magdalena Chaves, but people call me Lena. Teacher. That's my nickname.

Rose Arno: OK. We'll call you Lena, and please call me Rose or Mrs. Arno.

相手が英語を学ぶ留学生、それも初めての授業なので、留学生が先生を Teacher と呼ぶぎこちなさも生じているが、最後の行で先生は ... please call me Rose or Mrs. Arno. とファーストネームで自分を呼ぶことさえ勧めている。すなわち、フレンドリーで近い心理的距離を築きたいのである。

4. 心理的距離と呼称の変化

心理的距離によって、呼称が変化する場合がある。英国のレディング大学での知り合いのひとりである Ronald White 教授と手紙をやり取りしていた時期がある。最初、こちらからは Dear Professor Ronald White と手紙の書き出しに書くと、返事には Dear Mr. Tomihide Kondo や Dear Professor Tomihide Kondo と返事が来ていた。しばらくすると、あちらから Dear Tomihide などと書いてくることがあった。こちらとしては、何と書いたらいいのか少し迷ったの

であるが、思い切ってタイトルをはずし、Dear Ronald White や Dear Ronald と書いたこともあった。もう少し親密になると Dear Tomi となっていることもあったが、相手が有名な教授なので、こちらから Dear Ron とは書けなかった。このように呼び掛け語はお互いの心理的距離によって短期間のうちにでも変わるものである。ただし、多くの場合、主導権を持つのは目上であり、目下の方から積極的に心理的距離を縮めることは通常できないものである。また、相手がこちらの呼び掛け語が気に入らなければ、心理的距離が遠い前の呼びかけ語に戻すことにより、さり気なくその気持ちを伝えるものである。つまり、もし私が Dear Ron と呼びかけて、相手がニックネームでの呼び合いはまだ早いと思ったり気に入らなければ、今まで Dear Tomi や Dear Tomihide と呼んでいた呼びかけ語をたとえば、Dear Mr. Tomihide Kondo などに戻すのである。

松本亨の『ある学長の死』(Death of a College President) という英文小説がある。ある日、ある短大の学長のところへ、その短大の女子学生 (Makiko Oshita) と文通の結果、婚約したというオーストラリア人 (Thomas Baldwin) が彼女を探しに訪ねてくる。じつは、Makiko はオーストラリアでの勉学に興味があり、文通相手の家で住みたいと思っているし両親の許可も貰っていると書いたものだから、Baldwin は Makiko が彼と結婚しにオーストラリアに来てくれるものと誤解したのである。びっくりした Makiko は文通を止めていたのである。これは誤解を招いた Makiko に非があるとも言えるが、彼女の最初と最後の方の手紙の1つは以下のようなものであった。相手への呼びかけが変化していることがわかる。

(最初の手紙)

Dear Mr. Baldwin,

I saw your name and address in the "Pen Pal Wanted" column of the Tokyo Evening News. I would like to become your pen pal. I am a twenty-year-old Japanese girl attending a women's college in Tokyo.

(中略) Please write me soon and tell me more about yourself. I want to become intimate with you.

Very sincerely yours,

Makiko Oshita

(最後の方の手紙)

Dear Tom,

I was very happy to get your last letter and to know that I can go to Australia at last and live in your home. It's been my long-time dream to live in an English-speaking country. (中略) I will let you know as soon as possible when I will be arriving in Sydney. Looking forward to seeing you.

With lots of love,

Makiko

(下線は筆者)

最初の手紙では Mr. Baldwin と書き、自分のことも Makiko Oshita とフルネームで記載しているが、最後の手紙では、Tomと書き、自分のことも Makiko とファーストネームだけになっている。文通を重ねるうちに、心理的距離が縮まり、このようにお互いの呼び名が変わったことがわかる。

なお、この心理的距離に関連してであるが、子どもを叱るときに、そして子どもを少し怖がらせるときは、フルネームで呼ぶと効果的だと言われている。ジェームス・バリーの小説『ピーターパン』に出てくるピーターに憧れる少女の名前はウェンディ・モイラー・アンジェラ・ダーリング (Wendy Moiragh Angela Darling) というが、両親にたしなめられるときに、Wendy Angela Darling などと呼ばれると緊張するのである。つまり、英米の子はフルネームを呼ばれると心理的距離が一時的に遠くなり、叱られたり重大なことがあとに続くと察するのである。これは日本語にはない名前の使い方である。

5. 自己紹介のときに名乗る名前

前述のCulture Puzzle には以下のような自己紹介の会話の部分も紹介されている。やはり、留学生を対象にした最初の授業の会話からである。

Rose Arno: Now I'd like you to give your names. Let's start with the first person in the front row.

Yoshi Imada: My name is Imada.

Rose Arno: Imada, could you also give us your last name?

Yoshi Imada: Imada is my last name. In my country, most people call me by my last name. Even my friends at work use my last name.

Rose Arno: Would you like us to use your first name or last name in class?

通常、英語では名前を名乗るときは、ファーストネームか、フルネーム、あるいはその両方を使う。すなわち以下のいずれかである。(もちろん、My name is は I am でもかまわない)

My name is Yoshi.

My name is Yoshi Imada.

My name is Yoshi, Yoshi Imada.

上記の会話では、Yoshi Imada (日本人であろう) が、My name is Imada. と答えたため、Rose Arno は Imada がファーストネームだと考えたのである。逆に日本では以下のようにラストネームかフルネームで答え、ファーストネームで答えることは通常ないであろう。

私の名前は今田です。

私の名前は今田好です。

相手にラストネームをファーストネームと勘違いされると、常に苗字で呼

ばれることになり、場合によっては、あとあとまで直すのに苦労する。間違っ
て伝わった場合は、最初の段階ではっきり訂正するのがよいであろう。

6. 近いものから述べる英米のスタイル

英語圏では、名前を名乗るとき、ファーストネームを最初に言うが、これは
どうしてであろうか。名前に限らず身近なものから述べて行くのが英語のやり
方である。たとえば、住所は日本の住所表記は以下ようになる。

郵便番号 ⇒ 都道府県 ⇒ 市（区や郡）⇒ 町 ⇒ 丁目 ⇒ 番地 ⇒ 号
これに対して英米ではたとえば以下ようになる。

家（建物）の番号 ⇒ 道路の名前 ⇒ 町 ⇒ 州 ⇒ 郵便番号
家に番号を付け、道路の名前を住所の一部にするなど、日本と違う点があるが、
英米では身近なところからだんだん大きくなっていく。これは空間に限らず履歴
書に書く項目の順番でも最近のことがらからだんだんと過去にさかのぼるし、こ
れは統計なども同じである。

おそらくファーストネームを最初に言うのも、これと関係があるはずである。
フレンドリーさを求め、それゆえ個人を大事にする英米では、自然と身近なもの
を先に言うのである。日本語ではフレンドリーさを求めるよりは、相手に対して
尊敬というか畏怖の念で接するのが丁寧で礼儀正しいとされている。従って、遠
くからだんだん近づく手法が取られているのであろう。

7. さいごに

名前の使われ方の諸相を概観してきたが、その奥にはその文化や国の考え方
や価値観が投影されている。さらにさまざまな英米のコミュニケーションスタ
イルがあるが、それらを有機的に説明していく方法をこれからも模索してい
きたい。

参考文献

Levine, Deena et.

1987 *The Culture Puzzle: Cross Cultural Communication for English as a Second Language*: Prentice-Hall.

松本 亨

1977 『ある学長の死』、英友社.

